

フランス第二帝国初期における中等教育制度の近代化過程についての一考察

宮 脇 陽 三

内容目次

はじめに

一 ファル文相の改革

(一) 国公立中等学校

(二) 私立中等学校

(三) 教会立中等学校

二 フォルトゥール文相の改革

(一) 高等師範学校

(二) 国公立中等学校の教員人事の実情

(三) 国公立中等学校の教育の実情

三 ルーラン文相の改革

おわりに

はじめに

一九世紀フランス中等教育史において「教育の自由」(La Liberté de l'enseignement) はつねに重要な問題であった。ナポレオン一世以来の教育事業の国家独占に対して、教会側は既得権の回復とともに、民衆に対する教化事業の振興のために、教育事業経営の主導権を奪回するために虎視眈眈としていたからである。教会側は、当代フランスの政治経済の主導権を握って、社会の支配体制にない手となつてきた有産市民階級と手を結んで、本業の宗教業と副業の教育事業との結合を図ろうとしていた。それゆえ当代の教育界では、世俗的権力機関としての国家・地方公共団体側と、神聖的権力機関としての教会団体とが相互に縄張り争いを繰り返す戦場と化してしまつたのである。

この聖俗学校戦争が、「宗教は教会に、教育は学校に」という社会分業の原則にしたがつて、いちおうの結着がみられたのが、フランス第三共和国体制が発足する一八八〇年代以降である。

この小論では、(一)中等学校の「教育の自由」が一八四八年の二月革命後の王党派のファル文相の改革において、どのように推進されていたのか、とりわけ国公立中等学校における宗教教育の優位が、実証主義的な科学教育にどのような影響を及ぼしたのか、また(二)ルイ・ナポレオン三世の第二帝国初期におけるフォルトゥル文相の保守反動的な中等教育政策では、何が問題とされたのか、またその問題は当代のフランスの社会状況とどのように関連していたのか、さらに(三)穩健派のルーラン文相の中等教育政策が、フォルトゥル文相が敷いた保守反動的な教育路線をどれくらい微調整することができたか、について考察しようとするものである。

一 ファル文相の改革

(一)国公立中等学校

一八四八年の二月革命は、革命後のしばらくの間、国公立中等学校の厳格な生徒指導に動揺を与えることになった。七月王制期に王立中等学校(コレージュ・ロワイヤル)と呼ばれていた学校は、二月革命後はリセ(Lycée)という名称に復帰した。パリ市のリセ生徒はパリ市役所へ行列行進を行い、軍事教練の即時実施と、食堂での食事時間に政府系新聞『報知』(Monteur)の閲覧許可を陳情した。リセの寄宿生は自習監督教師(maitre d'étude)の面前で、革命期の穩健な共和派ジロンド黨員風の服装で愉快に歌った。

自習監督教師の暮しぶりにあやかりたい
そはいとも美わしく いとも羨しき

行為なりき

しかしそのような無規則状態は急速に鎮静化した。国公立学校のなかでは、高等師範学校(Ecole Normale)の生徒は、共和国体制を双手をあげて支持していた。一八四三年から四六年まで、当校の学生であり、後の有名な化学者・細菌学者となったパストゥール(Pasteur, J., 1822~96)は、当時の状況を親宛の手紙の中に書いている。「学校の教育は美わしく崇高な教育である。もし必要ならば、わたくしは神聖な共和国の利益のために勇敢に戦います。」(1117)

しかし当代の大多数の生徒は穩健派であり、自由、平等、博愛を象徴する赤、白、青の三色旗の共和国体制の支持者であったから、六月の政変では国家防衛に尽力した。リセの自習監督教師も不遇な生活状態にあったから、二月革命と革命派を支持した。とりわけパリ市のリセの自習監督教師は、半月刊雑誌『共和主義教育』を創刊した。かれらは、その同人雑誌の中で、国立中等学校長による苛酷な待遇に対する不満を表明した。国立中等学校長に対するかれらの恨みはきわめて深刻であったために、「教育の自由」を提唱するファル文相(Falloux, F., 1811~86、文相在任1848・12・20~49・9・13)の登場は、当初では、公教育高等評議会の委員を聖職者出身委員に全面的に改選する以前であったのでどちらかといえば歓迎されたのである。しかし間もなくファル文相がリセの自習監督教師に対する厳格な取締まりを行うようになったため、文相反対闘争を開始し、共和党系の新聞論調を支持するようになったのである。

その他の教師は、シモン(Simon, J., 1814~96)の雑誌『思想の

自由』の影響を受けて、国民党 (parti du National) を支持していた。カベニャック (Cavaignac) は、国民党を基盤として、一八四八年一月一〇日の大統領選挙に立候補したが、王党派のルイ・ナポレオン (Napoléon, L., 1808~73) に五四三万票 (七五%) 対一四四万票で敗北した。これはナポレオンに対する小農民階級の支持、大衆階級層での英雄待望熱、有産市民階級の「赤」恐怖心の結果であった。ルイ・ナポレオンの勝利は、とりもなおさず保守反動派の勝利であり、かれは余勢を駆って、一八五二年二月二日に国民投票で帝位につきナポレオン三世と称したが、普佛戦争の敗北によって一八七一年に退位をよぎなくされたのである。

二月革命当時の共和派のカルノ文相 (Carnot, H., 1801~88, 文相在任 1848・2・24~同 7・4) およびボラベル文相 (Vaulabelle, 文相在任 1848・7・5~同 10・12) に代って、保守王党派のファル文相 (文相在任 1848・12・20~49・9・13) がルイ・ナポレオン大統領の政権の一翼をになって登場してくることになる。

ファル文相は自由主義的教権主義者であり、ブルボン王家正統派の政治家である。かれの権力基盤は保守的な有産市民階級と聖職者階級である。かれは自己の支持勢力に対する周到な配慮のもとに教育政策を推進していくことになる。かれはヴィイユ (Veuillot) の教会立中等学校の設置推進者としてバロー・ファル内閣と呼ばれるほどの政治的手腕を発揮した。かれの教育行政の基本方針は、(一) 公教育高等評議会と大学区評議会での聖職者の発言権の増大を図ることと、(二) 教会立学校 (maison congréganiste) の振興によって、教会立学校における

教育方法と学力水準の維持を図ることにあった。

ファル文相の教育行政の施策は、一八五〇年三月一五日に、いわゆる「ファル法」(Loi Falloux) (4,299) に結実することになる。この法律は一八四八年のカルノ文相による初等教育の就学義務と無償を定めた初等教育法を廃止に追いこむ立法措置であった。それは学校の宗教的性格を強化し、初等教育の無償制は認めたが就学義務制は廃止した。また師範学校の教育課程の範囲も制限し、聖職者に対する教師資格免状の提出義務を廃止した。それは有産市民階級とは別の民衆階級からの教育への影響力を閉め出し、民衆階級は「学校に対する権利」(3,221) のすべてを失う羽目になった。その意味では、この「教育の自由法」は聖職者階級側での教育事業の自由化と保障するものであったとしても、決して民衆階級側での教育の自由を保障したものではなかったし、むしろそれを廃止に追いこんだものであったと言いうことができるのである。

ファル文相の後任者のパリュ文相 (Pariet, 文相在任 1849・10・31~51・1・23) とジロ文相 (Giraud, Ch. 文相在任 1851・1・24~4・6) はファル前文相ほどの慎重な態度を持っていなかったために、革新派を支持する初等教育教師に対して、公然とした反感を示し、厳格な規制を加えようとした。パリュ文相とジロ文相は学校教師に対する厳格な規制という点では、むしろかれらの後任者のフォルトゥ文相によりも上廻っていたのである。

(二)私立中等学校

国立中等学校が保守反動体制の規制に呻吟するようになって以来、私立中等学校での教育の荒廃も始まっていた。国家による中等教育事業の独占的経営は、私立寄宿中等学校にとっては両親による授業負担があつたとしても、有利な条件となつていたのである。なぜなら私立中等学校は、国立中等学校の教育を子弟に受けさせたいと希望しているが、しかしその寄宿舎には入れたくないと思つてゐる家庭の子弟を収容してゐたからである。当代では親は私立寄宿中等学校へ子弟を入寮させることが流行となつてゐたのである。なぜなら「私立中等学校教育の方が世話も十分に行きとどいてゐるし、親としても安心感をもつことができた」(6408)からである。例えばセーブル市の私立男子寄宿中等学校の校舎は、大きな窓が広い庭園に面して開放されてゐて、きわめて清潔で心身の健康にもよいと思われてゐたのである。

一八四九年以後、セーヌ県私立中等学校校長会は、学校経営の不振を解決するため公教育当局と和解した。一八五〇年の教育の自由化の法律は、公教育と私教育との和解の産物である。パリ市内の大規模な私立中等学校は経営の危機から脱出することができた。サント・バブル校 (Saint-Barbe) は教育の成功によつて有名校であつたが、それは当校の卒業生の強固な連帯精神の成果であつた。校長は国公立中等学校での服務宣誓を拒否して辞職した硬骨漢の教師を採用して、授業を担当させた。デポワ (Depois) やバシエロ (Vachetot) のような教師は、才能と高尚な精神によつて多くの生徒に人気があつた。政府当局者はそのような独立精神に燃える教師の行動を黙認したのである。

なぜならサント・バルブ校は国立中等学校に対して国立専門大学校への模範的な受験準備教育を示してくれたからである。

マサン校 (Massin) もまたサント・バルブ校と同じくらい繁盛し、フランス全国から多数の優秀な生徒を集めることができた。その他の普通の私立寄宿中等学校は国公立中等学校と教会立中等学校 (école ecclésiastique) の狭間に落ちこんで、急激に消滅していった。有能な校長は生徒の急減によつて学校閉鎖に迫りこまれないうちに、生徒の募集に腐心した。サン・ユリエ校 (Saint-Yrieix) のレイサンヌ校長 (Leyssenne, P.) は後に総括視学官にもなった人であるが、一八五二年に校内で宗教勤行を実施する措置を取つてゐる。しかし、かれは個人的には部下職員に対していかなる信仰告白義務も強制しなかつた。そのためラ・ビル (La Ville) 当局は当校への補助金の全額を廃止した。レイサンヌ校長の厳父は県副知事秘書であつたが罷免され、かれ自身もその学校を競売に付さなければならぬことになつたのである。

聖職者は一八五〇年のファル法の恩恵を直ちに受けることになつた。社会状況は極左勢力の排除と、一八五二年の政変にともなう社会変化の懸念に味方した。聖職者は大統領から国公立中等学校の教育事業を引き続いて経営する利権を獲得した。しかるに聖職者はそのために必要な組織と職員を手持ちしていなかつた。そこで中等学校教育事業を現状のままで聖職者の監督下に置くことにしたのである。一八五四年にカーン (Caen) の聖職者ダニエル (Daniel) は、「皇帝はわれわれに中等教育を提供してくれた。しかしわれわれは辞退せざるをえな

かった。われわれはなんらの用意もしていなかったからである。」

(1,129)

少数の聖職者は国公立中等学校に対して好意を示した。かれらは国立中等学校の優等賞選考にあたって協力した。パリ大司教シブル(Sibour)やパリシ(Paris)のような聖職者は、国立中等学校長の招待を受けて学校の儀式に喜んで出席した。

(三)教会立中等学校

一八五〇年三月一五日付けでファル法が施行されると、直ちに教会立中等学校(college ecclesiastique)が開設されることになった。学校開設にあたって、改めて地方公共団体の評議員に交渉する必要はなかった。なぜなら地方公共団体評議會は教会立中等学校のための校舎を無償で提供してくれたからである。アンスニ(Ancenis)とサン・ディジエ(Saint Dizier)はファル法の施行を待ち切れず、ダックス(Dax)町長は教会立中等学校誘致を陳情する書簡を聖職者に送付した。町長によれば(1,130)、新世代の青少年に対して道德的、宗教的な觀念を啓発することは必要である。社会においてこれまで行われてきた誤まりと過失を避けるために、根本から改革することが必要であるというのである。

フランスの全国の到る所で、このような声が聞かれた。私学教育委員会5(comite de l'enseignement libre)宛のブノ(Beugnot)の報告(1,130)によれば、ファル法の施行の一年後には、一一九校の神学校フチ・セミナールがほとんどすべて聖俗混成中等学校(collèges mixtes)に衣替え

したうえに、二五七校の教会経営の中等学校が開設されたのである。

イエスズ会教団はこの驚くべき成功に重大な功獻を果した。イエスズ会は国宝ルイ・フィリップ(Louis-Philippe, 1773・10・6—1850・8・26)の七月王国政府のもとでさえ、裕福な家庭の子弟の教育を引受けて成功していたのである。イエスズ会はフランス国境に近いスペインのパスサージュ(Passage)、ベルギーのブルグレット(Brugellette)、スイスのフリブル(Fribourg)の各中等学校の経営を委託されていた。一八五〇年の「教育の自由」法の施行後、イエスズ会の修道士は、フランスにおいて多数の協力者を獲得するようになった。バンヌ(Vannes)町助役は町長に対して、「わたくしは自分の息子を国公立中等学校へ入学させるよりも、モルビアン(Morbihan)校へ入学させるつもりです。」(1,130)と述べている。かれは県大学区長と当局者の援助を得て、教会立中等学校を開設している。メッツ(Meiz)では、聖職者は自前の中等学校を経営している。当校はサン・クレマン(Saint-Clement)修道院に移転し、イエスズ会教団内でも最も繁昌した学校となったのである。パリ市内ではポスト(Poite)街に大規模な中等学校が開設された。一八五二年の時点でイエスズ会経営の中等学校は二〇校以上に達していた。それらの教会立中等学校は、第二帝国政府の私学振興政策が一八五九年に変更された後であっても、「一九世紀フランスにおけるイエスズ会教団の黄金時代」(1,131)といわれるほど繁栄したのである。

聖職者の中には、所属教団に中等学校開設を依頼するだけでなく、所轄の司教管内の公立中等学校の経営の肩代わりを希望する者もい

た。デュパンルはオルレアン郊外の豊かな自然環境の中にラ・シャペル (La Chapelle) 校を開設した。サン・ニコラス・ド・シャルドネ (Saint-Nicolas du Chardonnet) 修道院長は当校の教師の資質の向上に尽力した。かれは当校における知育、教授法、教科書の選定、訓育の万般にわたって指導助言した。それゆえ宗教が支配的となり、哲学と歴史学の担当教師が教会の教義と權威に服従したとしても、家庭の親からの全面的な信頼を得て、大いに当校の発展に功献したのである。

中等学校教育界への聖職者の華々しい復帰にもかかわらず、信仰に熱心でない旧教徒は旧態依然のままであった。ランデュ (Rendu, A.) やリオン校教師のノワロ (Noir) のような旧フランス教会派の聖職者の教育活動は停滞したままであった。極右系のローマ法王権至上派の聖職者は異教徒の著作家の支持者に対して非難している。ゴム (Gauvre) は雑誌『蛟みぐく虫』(Ver rougeur) において旧教徒の立場から論争を展開している。ギリシャ語・ラテン語古典支持者はイエズズ会教育の支持を得てローマ法王に対しても勝利を占めた。

かくしてこれまで中等学校教育の国家独占に対して反対闘争をしてきた闘士も、聖職者による中等学校の濫造が中等教育の質的低下を招きはしないかと懸念するようになった。一八四九年以後、それまで大入学資格試験の受験者に対して、中等学校卒業証書の授与条件とされていた哲学と修辞学の履修を廃止する措置が取られた。ルノルマン (Lenormant) は国公立中等学校は科学を軽視していると非難したが、教会立中等学校に対しても同じ状況にあると認めざるを得なかったの

である。一八五八年にモンタンバン (Montanban) の聖職者ドネイ (Donay) は、ナポレオン三世に対して、(一)すべての神学校 (petit collège) を監督教師 (épiscopat) に引渡すこと、(二)哲学と歴史学の担当教師に旧教の正統な教義を遵守させることを含む完全教育課程の実施を陳情した。しかし大学入学資格試験の受験者の激増に対する苦情は無視されたのである。

聖職者はフランス全国における中等学校教育の奪回に完全に成功した。聖職者側からみれば、元来、中等学校の経営は教会の管轄事業であったのであるから、既得権を復活させたにすぎなかったのである。しかし教会立中等学校と国公立中等学校の間での生徒募集競争の激化は、しばしば家庭内部の紛争を引き起したのである。ある知事が述懐しているように、「一般に父親は神学校の教育にあまり関心を持っていなかったし、むしろ息子を公立学校へ進学させたいと考えていた。しかし母親は夫よりも聖職者からいっそう多くの影響を受けていたからして、息子を神学校へ進学させようとしていた。父親はそれに反対する。母親は自説を押し通そうとする。母親は絶えず自説を反復強調する。ついに父親は家庭の平和のために譲歩する。」(8248) ということになったのである。

二 フォルトゥル文相の改革

(一) 高等師範学校

フォルトゥル文相 (Fortoul, H. 文相在任 1851・12・2～56・6・30) は国公立学校に対してきわめて權威主義的な強硬な教育行政を

推進していったのであるが、その原因は何であつたのか。元国立大学教授のかれは国公立学校の内情を十分に精通しており、国公立学校の教師に対して反感を持っていたのか。おそらくそのような私情または私怨から厳格な教育行政措置が生まれてきたのではなくて、かれ自身の純粋な教育界の実情に対する認識から、国公立学校教育全体の立て直しを図ろうとしたのでないかと考えられるのである。

フォルトゥル文相は、国公立中等学校は一八五一年二月二日以後、まさに全面的な崩壊の危機に直面していると、事態を認識していたのである。

かれは、有産市民階級の「赤」に対する恐怖心と、政界での保守反動派の勝利の喜びに対して、必要にして適切な譲歩と妥協を行うことによって、世俗的国公立中等学校教育の崩壊の危機を救うことができると考えたのである。かれは国公立中等学校教育の崩壊の危機を招いた元兇は、中等学校教師の勤務の姿勢にあると見なしていたから、教師の利益と権威に対して苛酷な弾圧の措置を取った。かれは、すでに三年前の一八四八年の二月革命の日以来、国公立学校教師に対して向けられていた強硬な弾圧体制の仕上げに取りかかっただけにすぎないのである。とりわけ革新派の学校教師の温床となつたのは、パリ高等師範学校であるとして、独立精神 (esprit independant) の旺盛な高等師範学校を槍玉にあげたのである。

高等師範学校の学生の政治思想は、二月革命と第二帝国の時期に表面化した。国防軍に動員された高師生は、五月と六月の労働者階級の暴動に対して、有産市民階級の共和国体制を擁護するために校長に加

担した。ごく少数の高師生だけが労働者階級側に加担した。その後の大統領選挙では、高師生はラマルチヌ (Lamarine) を支持し、高師教員はカベナック (Cavaignac) を支持した。その後のナポレオン三世の第二帝国体制のもとでは、高師生の四分の三は常に反抗するようになった。高師生は自由主義者であり、市民の自由と穏健な民主主義を支持し、また社会主義と富裕者階級の金権主義に反対した。このような高師生の政治的偏向に対して、フォルトゥル文相は強硬な姿勢で直面することになったのである。

フォルトゥル文相は高師弾圧の第一弾として、デュボワ (Dubois) 校長を罷免し、ミシュレ (Michelle) を校長に任命した。新校長ミシュレはサン・ニコラス・ド・シャルドネ校卒業生であり、ローン・シャボ (Rohn-Chabot) 枢機卿 (教皇選挙権をもつ大司教) の地位にあったが、フォルトゥル文相の意を受けて、高等師範学校の政治的偏向を是正するための改革が必要であると考えていた。同校の副校長バシユロ (Vacheot) は高潔な精神によって生徒に深い感化を及ぼしていたが、それだけに窮屈な思いをしたのである。そのため同校の配属説教師グラトリ (Gratry) との神学と歴史学についての論争は、バシユロ副校長の転勤をよぎなくさせたのである。

かくして高等師範学校の校風はそれまでの自由主義的な雰囲気から、細かな規則が幅を利かせる厳しい管理主義に一変した。校内では「厳肅に」(grave) (1.119) ということが絶えず使用されるようになった。それまで厳肅でなかったり、また厳肅な抑制に値いしなかったことが校則違反というわけでもなかったのであるが、ミシュレ校長のも

とは、厳肅なことをばを使用し、つねに厳肅な態度を保持することが必要となったのである。

一八五一年度の高等師範学校の入学試験にあたって、政府は受験生の道徳的素行調査を受験前に実施し、品行不正と思われる者を閉め出す措置を取った。そのため当年度の新入学生徒は古参生徒から肌合いがしっくりとしないという眼で見られたのである。

一八五一年二月二日にルイ・ナポレオン大統領が権威国家を企図し、再選のための憲法改正が議会に拒否されるや、クーデタ (coup d'Etat) をかけ、一八五二年一月一日に憲法を制定して、一〇年任期の大統領に就任した。この政変は、高等師範学校の生徒の全員を共通の怒りに結集させることになった。高師生はパリ市内の防壁と戦うことを校長から防げられたけれども、少なくともパリ大学へ出かけて、「法の暴力」に抗議するシモン (Simon J.) に歓呼の声を浴びせたのである。

この事件は生徒の政治活動を取締まるきっかけになった。高等師範学校の新校則は一八五二年度の新学年度開始期の九月に公示されたが、すでに二年前から未公開のままで制定されていたのである。

新校則の内容 (I.20) は、次に示す通りである。パリ大学の各学部の講義に出席し退出する時には、すべての高師生はいかなる理由があれば、決して互いに離れたり、個別行動をしないで、校長の指定道路を団体で通行しなければならない。すべての行動は秩序正しく、沈黙のままで行わなければならない。高師生の本務は、(一) 宗教と公権威を尊重すること、(二) 忍耐力をもって勤勉に精励すること、(三) 上司や年長

者に服従し従順であること、(四) 校則を忠実に遵守することである。

一八五二年度の大学高校教授資格試験 (アグレガシオン) では、新教徒のペロ (Perot G.) とユダヤ人のブレアル (Breal, M.) が閉め出されたが、それは親王大統領ルイ・ナポレオンからの強硬な勧告によるものであった。国家体制にとって危険と思われる高師生を大学高校教授資格試験から排除することによって、その将来の進路を断ち切ったのである。とりわけ哲学科アグレガシオンはこれまで危険な思想傾向をもった中等学校教師の供給源であったということから廃止されることになった。そのほかの学科のアグレガシオンも文学科か理学科のいずれかのアグレガシオンにすべて吸収合併されたのである。そのうえ文学科と理学科のアグレガシオン受験の必須条件として三カ年間の教育実習が課されることになったのである。このアグレガシオンは七月王政期には文学、哲学、歴史学の文科系学科と、数学、物理学、博物学の理科系三学科の合計七学科の専門別に実施されていたのであるが、フォルトゥル文相は専門学科別アグレガシオンを廃止し、文学科と理学科の二学科だけのアグレガシオンに復帰させたのである。かれのねらいは「中等教育と高等教育の全体にわたって知的教養水準の低下を図ることにあった」 (I.16) というべきである。フォルトゥル文相の考えによれば、高度の専門化した学問は青年の精神を生意気にするだけであり、温厚な精神は学問の限界を乗り越えるだけではなくて、学問の限界を認識するために教育されなければならないというのである。それゆえ、かれは抽象的、思弁的な学問における哲学的な、また

歴史的な討議を排除して、反復暗誦学習と既成の權威と神に対する畏敬の念の育成を強調したのである。

このような精神的風土においては、天文学はふたたび神学の侍女に転落するおそれがあった。高等師範学校の修業年限は実質的には二カ年に短縮されたかのようになってしまった。なぜなら第一学年はすでにリセにおいて履修済みの教材の機械的な反復暗誦練習に充当されたからである。第二学年になってやっと学士号 (licence) 取得のための学習を開始した。第三学年は大学高校教授資格試験の受験準備学習よりもむしろ教育技術の習得に充当された。それゆえ高等師範学校の三カ年間は学問の真理の探究と図書館での学生の独自の学習が弾圧された時期となってしまったのである。フォルトゥル文相は「学者」よりも「穩健な教師」の養成を図ったといわなければならない。

しかし、このような窮屈な精神的風土のもとでは学問研究体制は委縮してしまい、優秀な国立中等学校教授や国立大学教授を養成することとはできなくなってしまったのである。そのことに気づいたフォルトゥル文相は、最優秀の成績をあげた学生に対して、卒業後二カ年の研修期間を設け、博士号に準備させる措置を取らざるをえないようになったのである。文科六人、理科六人の合計一二人の学生がこの優遇措置の恩恵に浴した。これらの学生は学校卒業時にアグレシオン受験を許可されたが、アグレガシオンに合格しても、三年経過しなければアグレジュ (教授有資格者) に変更できない適任証書を取得できなかったにすぎない。

フォルトゥル文相の後任者であるルーラン文相は一八五六年に高等

師範学校の修業期間を、第一学年末での学士号試験、第二学年末での専攻別の校内試験、第三学年末での大学高校教授資格試験の三カ年課程に複帰させる措置を取った。因みに学生はいずれの学年末の試験であつても落第した場合には即時退学しなければならなかったのである。このようなやり方は第三共和国体制の時代においても存続したのである。大学教授志望の卒業生は国立高等学校 (リセ) 教授時代に博士号論文を書きあげることになっていた。高師卒業生のデュルユイ文相時代から以後では、高等師範学校の使命は国民教育の発展のためには、中等学校教師の養成よりも、大学教授の養成に主眼を置くことが重要であるということが、広く認識されるようになったのである。

(二) 国公立中等学校の教員人事の実情

国立中等学校 (リセ) 教師のテーヌ (Taine) とサルセイ (Sarcey) は政府による管理主義的規制が強化された状況の中で、辞職に追い込まれた。一八五一年の哲学科アグレガシオンでのテーヌの不合格処分は不当な措置によるものであった。テーヌはヌベル校 (Neuberg) 教師に任命されていた。当校を管轄している大学区総長は善良な人柄の聖職者であつたから、かれはテーヌに対して慎重な態度を取るよう助言していた。かれはテーヌに対して、「わたくしたちはお互いに助け合い、注意しあおう。あなたは、もし生徒が無信仰な態度を示している場合には、わたくしにお知らせ下さい」 (I'll tell you) と勧告していた。テーヌは哲学授業において周到な配慮を行った。しかしある生徒は、あまり良好な席次でなかったことに不満を感じていたので、テーヌが

革命家ダントン (Danton) を授業中に賞讃したと、校長に告発した。その結果、かれはポワチエ (Poitiers) の国立中等学校の修辞学級担当教師に転勤する羽目になった。この転勤を発令するにあたって、文相は、「あなたが将来のために、まったく危険ではない教育を行うことを期待している。」(1121) と述べた。

ポワチエ校では、かれは校長に対して、「生徒が雑誌『地方人』(Provinciales) を読んでいますか」と質問した。校長は、「いいえ」と回答した。かれは、大学区総長から、授業の始めにラテン語でお祈りのことを述べるようにという職務命令を受取った。一八五二年度の新学期年度の始期に、かれはブザンソン校 (Besançon) の第六学級担任教師に左遷されたため、ついに辞職を決意したのである。

サルセイ (Sarcey) の国立中等学校での教師生活の始まりは、もっとひどかった。パリ高等師範学校卒業生として、ブルボン校 (Bourbon) 校で教育実習をやっている時に、かれは革命家ロベスピエール (Robespierre) を賞讃し、教室の授業ではデイドロ (Didrot) の『社交界の人びと』(Salons) を推奨したということでは非難された。かれはアグレガシオンを不合格となった後に、ショウモン校 (Chaumont) へ赴任した。当校へは危険思想家という容疑がかけられているが、そのことをまったく反省していないとみなされる教師が送りこまれていた。ショウモン大学区総長は監督下にある教員の宗教的意見についての質問紙法による調査を実施し、調査に協力しないで回答用紙を返送しなかった教師の給料を没収すると脅した。この思想調査用紙は透かして見えるようになっていた。

このショウモン大学区総長は管内学校教員に対してひげを切るようにという職務命令を出した。各教員のひげの切り方はさまざまであった。ある教員はあごひげを切っただけであったが、他のある教員は口ひげだけでなく頬ひげも切らなければならなかった。この職務命令について、サルセイは、大学区総長への上申書の中で、「ロワール川はこちら側ではあごひげ、あちら側では口ひげ」(1122) と遠慮なしに書いた。そのため、かれは聖職者とブルターニュ人の雰囲気をもったレヌバン校 (L'esneven) へ左遷させられた。暴れん坊のかれは、親切で高潔な人格の聖職者校長から歓迎された。そこでかれは、レヌバン校での勤務をさらにもう一年延期してほしいと要望した。しかしフォルトゥル文相は、サルセイの無礼なふるまいに立腹していたので、かれをロデ校 (Rodez) へ転勤させた。かれは、この転勤処分に憤慨して、いろいろな馬鹿げたことを行ったので、グルノーブル校 (Grenoble) へ再び転勤させられた。グルノーブル校での居心地は良く将来性もあるように思われた。しかしかれは、そこでもう十分であると思った。パリ市の新聞社からお招びの声がかかった時、かれは国立中等学校教師を退職する決心を固めたのである。

他の多くの者も、サルセイが退職する前に、国立中等学校教師を退職していた。とりわけ一八五二年に服務宣誓が強制された時には、中等教育界から退職する者が続出した。当代の国立中等学校教師の中には、良心に反する宣誓を行うことによつて、ルイ・ナポレオン大統領への忠誠義務の遂行に反対しているが、教職をやめたくはないという内面的な葛藤に悩む人びとが多かったのである。

ベルソ (Bersot) はルナン (Renan) 宛の書簡の中で、「わたくしは宣誓に賛成しません。おそらくわたくしは生活に窮して死んでしまうでしょう。」(1.123) と述べている。

アベ (Havet) は政治的弾圧に屈服したが、ベルソ宛の書簡の中で、「わたくしは弱い人間であり、諸般の事情から良心に反することになってしまいました。このような試練は短期間であるとしても、あなたは重い苦悩に負けない威厳と毅然とした生活の喜びを、しっかりと踏みしめることをお祈りしています。」(1.123)

政治的弾圧に屈服した人びとは、当局者から眼中にも入れられていないということを喜んでいた。サルセイは、第二帝国が復活した時に実施された第二回目の服務宣誓以後では、中等学校教育界の精神的風土はきわめて気楽であったと述べている。

しかし現職教師は監督権者からの不興または罷免を心配しなければならなかった。ファル文相はそのような人事を頻繁に行った。パリュ文相 (文相在任 1849・10・1~51・1・23) もそのような人事処分を濫用している。かれは、一八五〇年に教育行政機構のかなめとなる大学区総長の人事にあたって、大学区総長から県大学区総長に配置換えする措置を取っている。この措置によって、「大学区総長は県知事の召使いになってしまった」(1.123~124) のである。新任の県大学区総長は聖職者の寵遇を得るために、世俗者教育にできるだけ宗教的性格を加味しようとした。

フォルトゥル文相 (文相在任 1851・12・3~56・6・30) は、一八五四年に大学区総長が文相に完全に服従すること、また大学区総長の

部下教職員に対する監督権を強化することによって、大学区総長 (rectoral d'académie) の職を復活する措置を取った。

権威主義的な教育行政のもとでは、中等学校校長は教育の現場の責任者として、いつ罷免されるかもわからないという状況であった。ところで中等学校教師はそれほど簡単に養成できるものではない。それゆえ教育行政当局の強硬な姿勢の真意は、必要に応じて国公立中等学校教師でない人びとの中から、硬骨漢の学校教師を押さえこむ力綱を持った校長を引き抜こうとすることにあつたと言いうるのである。

公立中等学校配属説教師 (prêtre universitaire) との仲の悪い校長 (principal) は不遇になった。メイエンヌ (Meyenne) では、校長は学校配属聖職者をもって充当されていた。バンヌ (Vannes) では、校長は学校配属説教師とけんかしているという理由によって、退職年金受給権なしで免職処分になった。グレイ (Gray) では、校長が学校配属説教師の無作法なふるまいを注意したことだけで、転勤処分を受けた。サルバンディ (Salvandy) は聖職者に対して反対意見を述べたために、一八四九年に憲兵によって追放処分となった。エブル (Evreux) では、一八五〇年に優秀な校長が住民の懇望にもかかわらず、罷免された。

とくにパリ市内の国立中等学校教師は、苛酷な弾圧を受けた。ブルボン校 (Bourbon) の校長は、アブ (About) とサルセイの信用失墜行為を教育実習期間中に告発しなかったという理由によって、退職処分が発令された。シャルマーニュ校 (Charlemagne) の校長は、教育改革についての意見を発表した日の翌日に辞職命令を受けたのである。

一八四九年以後、多数の教師は、「挙国体制党」(le grand parti de l'ordre)に反対する新聞に投稿した時には身分保有が危険であると思うようになった。デシャネル(Deschanel, E.)は雑誌『思想の自由』(Liberté de penser)の中で、旧教主義は将来性と活気に満ちた社会主義の消滅を意図していると非難した。国公立大学^{コレージュ・ユニベルシテ}学校教育団体評議会は旧教主義に反対する改革は困難であるという見解を表明した。雑誌『思想の自由』編集長ジャック(Jackes, A.)は免職処分となり、私立中等学校教員として就職することもできなくなった。そのため、かれは自由の新天地アメリカへ移住せざるをえなくなった。

フォルトゥル文相が登場した一八五一年二月以後は、政府を批判するというような大胆不敵な行為はできないようになった。ほんの少しの羽目をはずした言動も処罰の対象になった。一八五二年にバル・ル・デュク校(Bart-le-Duc)の哲学担当教師が唯心論者(spiritualiste)の立場からの著書を公刊した。かれは、その著書の中で、靈魂の永劫の苦しみの存在に疑念をもつと述べた。その結果、かれは信仰上の理由によって、小規模校の公立中等学校の第四学級担当教師に左遷された。かれは転勤処分を不満として退職し、悲憤のうちに死んだ。

用心深い教師は、たえず警察の監視の眼にかこまれているような気持ちであった。ベルサイユ校(Versailles)の生徒が、一八四九年に共和主義的傾向の示威運動を行った時、当代の文相は、警察から社会主義者と目されている教師と自習監督教師の名簿の提出を命じたのである。

一八五二年に大学区総長は「聖心」(Saint-Espirit)の礼拝式に欠席した教師に対して、警告を発した。大学区総長は、生徒が祭式の時に讃美歌を歌わなかったならば、即時厳罰に処することを命じた。フォルトゥル文相は一八五三年に学校教師に対して忠誠誓約の服務宣誓者名簿の提出を命じた。

中等学校教師の中では、哲学担当教師が最も危険であった。一八五〇年にナポレオン・バンデ校(Napoléon-Vendée)のカーン(Cahn)は、ユダヤ人であるという理由から、ルノン(Luçon)の聖職者の要求によって罷免された。国公立中等学校の教師の中でも、教員人事において人種差別が必要であると主張する者がいた。クールノ(Cournot)は、『公教育評論』(Revue de instruction publique)(一八四九年一月一五日号、一八五〇年二月一五日号、同三月一五日号)の中で、ユダヤ人が哲学科アグレガシオンに合格して、国立中等学校の哲学担当教師に任命されたのは不当であると教育行政当局に苦情を申し入れた。クーザン(Cousin)は当時の苦境の中で、パリ高等師範学校卒業生の教え子が聖職者から訴訟されるのを見捨てるよりほかなかったのである。そのためユダヤ人出身教師ラム(Lamm)は、いろいろと煩悶した末に自殺した。

国立中等学校教師としての本来の職務面ではなんらの過失もないのに、たんに思想面で独立派と見なされただけで処罰の対象になったりした。またなんらの補償金も支給されないままに、転勤処分になったこともある。デニ(Denis, J.)は一年間に実に七校もの国立中等学校をたらい回しされている。かれは古代ギリシャ哲学の研究によって、

学士院賞を受賞したが、その著書を公刊した時に、序文の中で、学問の自由が保障されていないことが教員人事の紛争問題の解決を妨げていると述べたのである。そのために、かれはストラスブール校 (Strasbourg) からポー校 (Pau) へ左遷させられた。ラ・ロシェル校 (La Rochelle) の三人の教師は、たまたま大学区視学官が監視していた示威行進に好奇心から参加したために転勤処分を受けた。ナント校 (Nantes) 教師ル・シャ (Le Chat) は新教徒の女性と結婚し、新教徒としての洗礼を受けた息子を持ったという理由で転勤処分を受けたのである。かれは教師の職を辞職し、ナントに定住して、後にはナント市長に選出された。

(二) 国公立中等学校の教育の実情

フォルトゥル文相は、中等学校古典課程において、文学と理学の地位を同等にするための改革を実施したいと考えていた。

一九世紀中頃のフランスでは産業革命の発展にともなうて、科学が重視されるようになってきていた。経済学者からは、学校教育と社会の生産労働に従事する人びとの要求との間に著しいずれが生じてきていることが指摘されていた。社会主義者シュバリエ (Chevalier, M.) はジルメン (Villemain) 文相宛の報告書の中で科学教育の充実を要望している。ブランキ (Blanqui) も道德学士院において、学者が発見した成果が学校教育に取り入れられていないと批判した。

一八四七年のデュマ (Duma, J. B.) はパリ大学理学部の所見として、国立中等学校における科学教育の状況について、次のように批判

している。国立中等学校の第六級から第四級までの生徒は、科学を履修していない。第三級から修辞学級までの教育課程では、科学は選択科目としてしか配当されていない。哲学級では大学入学資格試験を考慮して、たんに学術用語や枝葉末節の観念や受験用の公式などを暗記させているだけであり、生徒に対して過大な負担を負わせている。そのため理科系の高等専門大学の入学試験における科学受験準備教育は、国立中等学校よりも私立中等学校において熱心に行われているというのである。

『公教育評論』に掲載されたデュマの論文は、パリ市の国立中等学校長の反響を呼び起した。かれらは国立中等学校における科学教育の進展と、科学講座の新設、また理工科大学校 (エコール・ポリテクニク) 入試での合格者数を取り上げて、デュマに反論した。

一八四七年二月二四日以後では国立中等学校教育の改革の必要性が叫ばれるようになった。『思想の自由』誌におけるベルソの中等学校教育改革の必要性についての要旨 (I, 135) は、次に示す通りである。国立中等学校としては、(一) これまでのように少数者のための教育機関にとどまるのか、それとも(二) 新規の社会の要請に応ずるために拡充していくのが問題であるというのである。

共和派のカルノ文相 (Carno 文相在任 1848・2・24～48・7・4) ボラベル文相 (Vaulabelle 文相在任 1848・7・5～10・12) は国立中等学校教育の改革の必要性を認識していたが、時間が不足していたために着手するに至らなかった。その後の政治の反動期において、中等学校教育改革は断念させるところか、積極的に推進していく方向に

動いて行った。なぜならギリシャ語・ラテン語古典人文主義教育は、社会主義を促進していると非難されたからである。バスチア (Bastia) はラテン語と教師の勧誘によって社会主義思想を植えつけられた青年を「強盗の奴隷」と呼んで非難した。

そこでサン・シモン派の社会主義者フォルトゥル文相は、行動派の権威主義者のデュマとル・ペリエ (Le Verrier) の協力を得て、国立中等学校の教育改革に取り組むことになったのである。

一八五一年のルイ・ナポレオンによる革命の支持者であるフォルトゥル文相は、フランスにおいて自由主義の学校を根絶させるほどの経済的繁栄をもたらすことによって、議会と新聞を鎮圧しようと考えたのである。そのためフォルトゥル文相とその協力者は、国立中等学校が弁護士や新聞記者を養成しなくなればなるほど、ますます多くの技師と工業従事者を養成するようになると考えたのである。

当代のフランスの工業界の実情からみれば、サルバンディ文相 (文相在任 1837・7・4・15～39・3・30) 時代に制定された中等教育制度はまったく時代に合わなくなってしまうっており、文学と科学に同等の価値と権威を保障して、生徒を文科と理科のいずれかの専攻課程に配分するような教育制度の新設が避けられないようになってきたのである。

フォルトゥル文相は一八五二年四月一〇日に「文理科履修分離」 (bifurcation) の教育課程を公布した。中等学校生徒は、中等学校の第六、第五、第四学級の教育課程では、全生徒が同じ教育課程を履修する。リセでは国語科と実用的教科が主要教科になる。ついで第三、

第二、修辞学級では文科と理科に分離する。ただし完全な分離ではなくて、いずれの課程の生徒であっても、文学が共通必須科の課程の生徒であっても、文学が共通必須科目として週当り5時間配当されていた。

このような教育課程が粗野で実用主義の無教養な人間を産み出すのではないかという懸念は適正ではない。グレアル (Gréard) によれば (1.137)、文理科履修分離の教育課程は当代の教授法に精通した教育専門家によって立案されていたのである。

国立中等学校の実際の授業では、口頭練習、頻繁な質問、教科書の解釈と説明、比較文法の観点から採択された生きた例文の学習に先立って、生きた文法の説明と国語作文が奨励された。長時間を必要とする長文の要約や、機械的な手仕事だけの学習は排除された。歴史科では国民史 (histoire nationale) が優先された。国民史担当教師は、こまかな事実に入力することはできるだけ避けるようにして、生徒の学習負担をなるべく軽減したし、また宗教、芸術、文学、工業、商業が民衆の生活の発展に及ぼした影響を説明した。

現代外国語と製図 (dessin) も復活した。この新教育課程は革命期の中央学校 (école centrale) の教育課程と共通点を持っていた。新教育課程は国民公会時代の自由主義的教育家デスチュ・ド・トラシと第二帝国時代の頑固な権威主義者ル・ペリエとが合体した産物であった。ところで教育内容では類似点がみられるとしても、教育目的では明確な相違点があった。中央学校は中等教育よりも高等教育を志向していたのであるが、フォルトゥル文相は中等教育を初等教育水準へ引

き下げようとしていたのである。高度な中等教育への懸念と、中等教育での落ちこぼれをつくらないという配慮とが、中等教育の学力水準の低下をもたらしたのである。科学はたんなる応用の手段に転落し、文学も試験準備のための手段に転落したのである。哲学では、青年の魂から道徳と神の裁きという高尚で多産な分野が削除された。その結果、哲学は論理学に縮小されてしまい、単なる「理性の体操」(1.138)に変更されてしまったのである。

このような学力水準の低下傾向は、「並才のアグレガシオン」と呼ばれた専科アグレガシオンにも見られた。専科課程担当教師は従勞な学習や、取るに足らない小利口な、狭い専門分野の不確実な知識にしがみついていた。パリ高等師範学校出身の教師の場合には、博覧強記であるとともに、古典研究に熱心であった。中等学校の文学課程ではつねに詩人や著作家のほん訳が行われた。一般に聖職者は学問の専門性ということにほとんど無関心であった。それゆえ同じ教師に対して、いろいろな雑多な授業を担当させるということが慣行となり、そのまま受け継がれていた。それゆえ歴史学担当教師が、ル・ペリエから授業視察の時に、その専門教科について質問された時、「わたくしはあまり知っていない。生徒はラテン語とギリシャ語を学習している。」(1.139)と回答する始末であった。

新教育課程の問題点は文科と理科に学年の途中で分離した生徒が、最終学年の論理学級で再び合同するということである。デュマは、それは中等教育の道徳的統一と友情を育成するために必要であると考えたからであるが、実際には良好な秩序の維持と、論理学級での集中学

習を妨げてしまうことになったのである。サルセイによれば、自分が所属している勤勉で素直な第二学級の中へ、毎週二回、約四〇人の理科の生徒が授業の受講のために入室してくるために、まったく学習が手につかなかったというのである。

新教育課程の第二番目の問題点は、生徒に対する細かすぎる規則の強制で、生徒が自発的で積極的な学習に取り組めるようにするために授業時間をこま切れにした授業時間割表を実施したことである。フォルトゥル文相は大臣室で懷中時計を取り出して見ながら、「この時刻にはフランス全国の中等学校においてラテン語仏訳が行われている。」(1.140)と述べて、全国中等学校教育を完全に掌握していると思っていたのである。しかし中等学校の現場の教師の側では、教育という仕事の中味は、そのような外面的な形式からだけではとらえることはできないのではないかと考えていたのである。他方、生徒の側では、毎日、学校生活についての覚書を書いたり、学級日誌に細かく記入するというような面倒な書類づくりに追われていた。

新教育課程の実施にともなって、しばらくの間、生徒の側では経済面では学費の負担が増えることになった。復習も規則で定められた。復習担当教師は生徒から直接に復習指導の謝礼金を受取ることを禁止された。この措置は復習教師のせいたく品の節約にもなり、また一般の人びとからの尊敬によって埋め合わせられると考えられたのである。しかしそれに代わる補償と、復習教師の募集を円満に進めていくために、国立中等学校の寄宿舎費の値上げ、つまり復習担当教師の臨時収入を増額する措置が、一八五三四月一六日の勅令(1.140)によって

取られた。この措置の実施とともに、国立中等学校教師の私立中等学校への出講が禁止された。

この出講禁止措置は世俗系私立寄宿中等学校にとつて新しい打撃となった。寄宿舎費は、リセ・ルイ大王校では二、一四一フランから三、六〇〇フラン、またリセ・ルリアン校では一、二四三フランから一、九八三フランに値上げされた。校長の固定給は、パリ市では六、〇〇〇フラン、地方では四、〇〇〇フラン、三五〇〇フラン、三、〇〇〇フランの三段階である。

アグレジェ資格教師の固定給は、パリ市では三、〇〇〇フランまたは二、〇〇〇フラン、地方では二、〇〇〇フラン、一、八〇〇フラン、一、七〇〇フラン、一、六〇〇フランの四段階である。

教師の臨時収入は、各寄宿生が支払う寄宿舎費から九サンチームの2倍の控除額と、通学生の授業料と第六学級以降の各通学生が支払う受講料との合計の一〇分の五の相当額の合計金額である。この給与規定の実施によつて、多数の初等学級段階の生徒が経済的に過重な負担を強いられるのではないかと懸念された。

ところでこのような教師の待遇改善の措置が取られたとしても、厳格な職務規定の実施の埋め合わせにはならなかったのである。重大な教育改革にあたっては、なによりもまず第一に、現場の教師が理解し支持し準備していた場合にしか成功しないということが判明したのである。中等学校教師は、教育行政当局がいつもかれらを苦しめたり、威圧を加えようとしていたために、新教育課程といえどもたんに不愉快なことを押しつけてくる手段としてしか見ていなかったのである。

新教育課程の実施にあたって、教育行政当局と学校教師との間にはたえず紛争が起つた。独立派の教師は、当局の拘束を避けるために、ある時は攻撃的な態度、ある時は逃避的な態度を表明した。生徒の学業の状況については、毎日、進歩の状況を記入することになっていたが、このような規則に対して、教師のサルセイは、一週間の生徒の学業において、前代未聞の信じ難いほどの優秀な成績を記入することによつて忠実に遵守したのである。しかし大多数の教師はおうむねその職務を忠実に遂行した。かれらは、法規に定められた通り辛抱強く、疲れ切つた諦めの気持でもつて、あらゆる雑用を処理していった。現代外国語と図画の担当教師はなかなか見つからなかったために、新教育課程における目玉商品は大きな壁にぶつかったのである。

一八五〇年から五二年までの間、国立中等学校の教育事業は不振であつた。その生徒数は大幅に減少した。無産者階級による革命の恐怖が遠のき、ルイ・ナポレオン皇帝政府の基盤が確立してくるとともに、ようやく国立中等学校の人気も回復してきたのである。

新教育課程では理科は優遇されていた。教会立中等学校では理科教育はまったく行われていなかった。そのため国公立中等学校は教会立中等学校とは別の理科教育に重点を置くことによつて、教会立中等学校との競争に勝つことができるようになったのである。

国公立中等学校へは、一八五四年以後であっても、官吏、高級軍人、大地主の子弟はなかなか進学してこなかった。国立中等学校へは新興の中産市民階級の子弟と、総括視学官によつて推薦された給費生が進学した。それらの生徒は学業に対して真剣に取り組んだために、教師

はがんじがらめの規則にしばられた窮屈な生活に不快感を持っていたが、生徒の指導にあたつては、模範者として熱意をもって、職務を遂行したのである。

公立中等学校 (collèges communaux) はたゞず私立中等学校との競争にさらされていたが、有能な校長は家庭の親からの支持を得ることができた。ルール校 (Lure) は一八五〇年には不良校とみなされ、廃校寸前にあった。しかるに一八五一年にコロン (Colomb) が新任校長として着任し、その後二二年間にわたつて鋭意経営に努めた結果、フランスで最も有名な優秀校に仕立てたのである。

モー校 (Meaux) ではギユ (Guyot) が校長として着任した。かれは二〇年間にわたつて校長として在職したが、その間に生徒数が数十人単位の小規模校から、寄宿生二〇〇人と通学生一一五人の合計三一五人の中規模校へ躍進させた。スミウル校 (Semur) ではピオン (Piox) が二五年間にわたつてすべての学級の指導にあたり、一八五九年に同校の校長に就任したが、多大の成果をあげたために、校長を退職後、同市の市長に選出されている。

オランジュ校 (Orange) では、農民出身で二種類のバカロレアの資格取得者の頑張り屋アンベル (Imbert) が、一八六一年に校長に就任したが、当代のデュルユイ文相が賞讃するほどのすぐれた教育の業績をあげたのである。ディナン校 (Dinan) は一八五〇年の教育自由法によって廃校に追いこまれていたが、第三学級担当教師バニエ (Levanier) が一八五一年から七七年まで二六年間にわたつて校長として尽力した結果、学校の復興に成功した。それゆえ權威主義的な

第二帝国初期時代の息苦しい国立中等学校においてさえ、生き生きとした学校生活と、教育の進歩が多くの中等学校において見ることができたのである。

三 ルーラン文相の改革

強硬な權威主義教育行政を推進したフォルトゥル文相は、一八五六年に死亡した。かれの後継者はルーラン文相 (文相在任 1856・8・13—63・6・23) である。ルーラン文相は多くの立派な教育構想を提唱したが、実現にこぎつけたものはなかった。かれはフランス教会派の法律家であり、その教育行政の基本方針は、(一) 国公立大学学校教育団体 (ユニベルシテ) を宗教団体からの干渉から擁護すること、(二) 世俗人とローマ法王至上権派、またそれらの人の主張に反対する聖職者との間に平等な立場の同盟を維持していくことにあった。

一八五八年に大学区総長テリ (Tiey) は、フランス社会における二大權威である国家と教会との同盟が必要であると主張した。しかしルーラン文相は自由主義派とみられることを懸念して、テリの提唱に乗らなかつたのである。かれは、一八五二年の文理科履修分離の新教育課程は失敗であつたと認識していたが、さりとてそれを廃止するということまでは考えていなかった。かれは、中等学校教師に対して、これまで通りの服務規律の厳守を要請した。

かれは、パリ高等師範学校の志願者数が減少傾向を示していたために、同校の改革に着手し、ミッシェル校長をニザル (Nizard) 校長に交代させた。ニザル校長はナポレオン三世皇帝の友人であり、フォル

トゥル文相の気嫌をそこなわないためと、新政府の仕事に協力するために、国立中等学校での文理科履修分離制度を支持していた。ニザル校長は文学崇拜者であり、青年の学生に対する深い愛情を持っていた。かれは校長に就任すると同時に、陰気な修道院的な雰囲気刷新するための改革に着手した。学校の食堂において議論したり、余暇時間に歓声をあげたり、音楽会を開くこともできるようにした。その結果、学校の自由主義的な雰囲気になれる元気な青年志願者の人数がようやく増加するようになったのである。

そうはいっても、この自由主義的風潮はまだ相対的なものでしかなかった。授業では非公認の書物の使用が黙認された。しかし生活面では、高等師範学校生徒は、朝と夕べのお祈りの時間に出席することと、日曜日の礼拝^{ミサ}に出席することは義務となっていた。一人の生徒が旧教を信仰していないという理由から、お祈りと礼拝への出席を免除してほしいと学校当局へ申し出た。それに対するパスツール副校長 (Pasteur) の回答は、次に示す通りである。

「もし君が本当に新教徒であり、宗教大臣の証明書によって新教徒であるということが証明されたならば、または国家公認のいずれの宗派にも所属していないということが証明されたならば、本校を退学すべきである。」(1,145-146)

学校当局による無神論者追放方針と、帝政復活派のニザル校長に対する生徒の不満は、しだいに高まって行った。数年後に国会上院においてサント・ブーブ (Sainte-Beuve) が聖職者に反対する趣旨の演説を行った時、本校生徒がサント・ブーブ支持を宣言したために、つ

いにニザル校長を辞任に追いこんでしまったのである。

当代の国立中等学校での授業は、一八五二年の所定の教育課程に準拠して実施されていた。教育行政当局による教師と生徒の思想傾向についての不信感から、龐大な量の知識の詰めこみ授業が行われた。生徒の週当り授業時間割表においては、ラテン語仏訳、ギリシャ語仏訳、ラテン語詩、ラテン語演説、国語講読、歴史書講読、数学、現代外国語の授業がぎっしりと詰めこまれていた。

中等学校での授業は、伝統的な旧式の教授法によって行われた。当代の授業風景を、ラビス (Lavisse, E.) は次のように回想している。「わたくしたちはただ一人の古典著作家でさえ、本当には知っていなかった。それらの著作家は無色の無言の世界を走馬灯のように走り去って行く影のような存在であった。わたくしたちは古典人文科の授業から、真実の人間性を何も教えてもらわなかった。」(1,146-147)

当代の国立中等学校では暗誦が幅を利かせており、哲学は無視され、科学は軽視され、徒らに何かといえど処罰が横行していた。したがって国立中等学校よりも比較的規模の小さな公立中等学校の方が生徒指導もあまり厳しくなく、校則も柔軟に運用されていた。そのため公立中等学校の卒業生のラビスは、ラオン (Laon) の公立中等学校時代を「最も楽しかった学校時代」(1,147)と呼んでいるし、リアル (Liard, L.) やファレズ (Falaize) も公立中等学校時代の良心的で親切で寛容な精神を持っていた恩師に対して深い感謝の念を表明しているのである。

おわりに

(一)二月革命期の共和派のカルノ文相とボラベル文相による革新的な教育行政に代って、王党派で教会聖職者階級を代表する貴族政治家のファル文相が登場してくる。このファル文相と、その後のルイ・ナポレオン大統領・皇帝時代のフォルトゥル文相とは、どちらもが保守反動的な権威主義的な教育行政を推進したにもかかわらず、一方のファル文相の役割は主として教会聖職者の中等学校教育事業への復権を促進したことであり、他方の社会主義者の学者フォルトゥル文相の役割は主として国公立大学学校教育団体(ユニベルシテ)の教育事業の維持と発展を図ることにあったという事情が解明されたのである。

(二)フォルトゥル文相による中等教育制度の近代化の具体策は、文理科履修分離制度(ビフルカシオン)の導入であったが、これはわが国の明治初期から戦前の旧制高校が文科と理科に大別されていた制度の原型と目されるものである。ただし旧制高校において文科と理科が同格の専攻課程として成立していく社会的背景としては、日佛両国とも産業革命の進行にともなう工業化社会の成立と発展があったという事実をおさえておくことが大切である。なぜなら学校体系の中で占める理科の地位は現実の社会の生産その他の機構の中で占める理科系学問の地位を反映するものだからである。

(三)フォルトゥル文相はユニベルシテの壊滅の危機を招来したのは学校教育界での教師の自由主義的風潮にあるとの認識から、苛酷な教員人事を行い、高等師範学校に対しても弾圧を加えたのであるが、その

ような試練によく耐えて、高等師範学校の自由な校風が發展してきたのである。(平成元年九月七日稿)

参考文献

- (1) Weill, G., Histoire de l'enseignement secondaire en France, 1921.
- (2) Durkheim, E., L'évolution pédagogique en France II, 1938.
- (3) Cogniot, G., La question scolaire en 1848 et la loi Falloux, 1948.
- (4) Palméro, J., Histoire des institutions et des doctrines pédagogiques par les textes, 1951.
- (5) Ponceil, F., Histoire de l'enseignement en France 1789 ~ 1964, 1966.
- (6) Mayeur, F., Histoire générale de l'enseignement et de l'éducation en France III (1789 ~ 1930), 1981.
- (7) Smith, R. J., The Ecole Normale Supérieure and The Third Republic, 1982.
- (8) Gontard, M., L'enseignement secondaire en France, 1984.
- (9) デュルケーム、小関藤一郎訳『フランス教育史上・下』普遍社、一九六六年
- (10) アントワヌ・レオン、池端次郎訳『フランス教育史』(文庫クセジュ)白水社、一九六九年
- (11) 拙著『フランス大学入学資格試験制度史』風間書房、一九八一年
- (12) 拙稿『フランス中等教育教師養成制度の成立と発展』(『佛教大学文学論集第十二号所収』昭和五三年

【備考】文中の()内の数字は、文献番号と文献の引用頁数を示す。